



| | |
|------------------|---|
| Title | ソ連初期の「ウズベク人」創出におけるマイノリティ集団 |
| Author(s) | 植田, 暁 |
| Citation | 日本中央アジア学会報, 18, 65-66 |
| Issue Date | 2022-07-31 |
| DOI | 10.14943/jacas.18.65 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/91608 |
| Type | article |
| File Information | JB18_015ueda.pdf |



[Instructions for use](#)

ソ連初期の「ウズベク人」創出における マイノリティ集団

植田 暁

本報告は、公開パネル「マイノリティ研究の新地平——ユーラシア近現代史の多声的再構成に向けて——」の第2報告として、量的資料を用いた研究の可能性を提示することを目指した。歴史統計は、それ自体歴史的コンテキストのなかで作成されたものであり、史料成立過程の解明は歴史研究の重要な主題である。統計資料は情報源としても重要であるが、量的情報から歴史事象を復元する際には記述資料を扱う際とは異なる工夫も必要となる。本報告では、報告者の研究の一部を方法論の面から紹介するとともに、現在進行形の試行錯誤を提示することで、量的史料の可能性と課題を浮き彫りとした。

量的史料を歴史研究に活用するための道具として、地理情報システム(GIS)を利用した。GISは様々な学問分野における活用が進んでおり、歴史学における活用事例も年々増大している。中央ユーラシア史研究におけるGIS利用は、イスラーム地域研究プロジェクトの一環として小松久男先生と後藤寛先生によって実施されたフェルガナプロジェクトが重要である。本報告もフェルガナプロジェクトの成果を基に発展した研究のひとつである。

旧ソ連中央アジアの民族名称とアイデンティティについては、膨大な先行研究が存在する。特に、1924年民族境界画定に関わる諸問題に関する研究は厚い。先行研究の成果をごく簡単に概括すれば、以下のように整理できよう。20世紀初頭までの中央アジアにおけるアイデンティティは、言語、宗教、系譜意識、生活習慣、人生儀礼、生物学的特徴など様々な要素によって影響される、多層的・状況対応的なものであった。人口統計資料における「集団」や「民族」は原則的に当事者の申告によるとされるが、回答はアイデンティティの一側面でしかなく、編纂過程においてもカテゴリーの整理や書き換えが行われた可能性が存在する。すなわち、統計の記録する「民族」や「マイノリティ」情報を歴史研究に利用する際には、厳密な史料批判が不可欠であることが先行研究によって指摘されているのである。

量的史料の視覚化とそれに基づく分析事例として二つの例を提示した。1例目は、1909年の史料に基づいてコーカンドオアシスの詳細な住民分布を復元したものである。空間的な諸集団の分布状況を、文献史学、人類学、考古学の先行研究と照らし合わせることでオアシス

の拡大過程を復元し、併せて1909年統計の史的性質に関する評価を実施した。2例目は、フェルガナ盆地の住民構成を1909年と1926年の統計に基づいて村レベルで復元した時系列の比較である。1924年の民族別境界画定を挟んだ2時点の比較からは、サルト人からウズベク人へのカテゴリ変更という最も目立つ変化に加えて、ウズベク人以外の集団がウズベク人へと再カテゴライズされる過程やその他のマイノリティのカテゴリ変化に関する興味深い事例を得られた。

視覚的に印象的な二つの事例紹介に続いて、その背景と限界に関する整理を行った。二つの事例は量的情報の豊富なフェルガナ地方を対象としており、情報源として用いた統計資料も例外的に質の高いものである。同様の分析を他地域、他時点で行うことは実質的に難しく、1930年代以降に分析範囲を伸ばすことさえ容易ではない。

提示した事例についての分析を深める試みのひとつとして、1917年の農村人口統計と組み合わせる試行を提示した。1917年統計をこれまで全面的に利用しなかった背景として、情報に欠落があること、編纂が1920年であるため革命の前後いずれの認識を記録したものであるかの判断が困難であることがあった。以上の史的限界を踏まえたうえで、特に変化の見られた村落を対象とした分析の結果を示した。具体的には、マイノリティのウズベク人へのカテゴリ変更やカシュガル人／ウイグル人に関わるカテゴリ変化が発生した時点について、新たな知見を提示することができた。

以上の事例紹介を踏まえて、量的史料を利用したマイノリティ研究の課題と可能性に関して整理を行った。統計資料は厳密な史料批判とともに利用すれば、記述史料などと組み合わせることで、記述史料のみからでは捉えられない情報を得ることができる。GISによる歴史統計資料の分析は傾向を見いだすことには適しているが、統計的手法によって因果関係の説明を行えるほど質の良い大量の歴史統計データを準備することは一般的には困難である。そのため、発見した傾向を説明する記述史料あるいは民族学報告などの調査が重要となる。

参考文献

植田暁 2020『近代中央アジアの綿花栽培と遊牧民——GISによるフェルガナ経済史——』北海道大学出版会。

小松久男・後藤寛 2009「中央アジアの動態を読む——GISによる地域研究の試み——」水島司・柴山守編『地域研究のためのGIS』古今書院、95-112頁。

(アジア経済研究所)